

千代田区に埋もれた戦後のアメリカ生活を発掘する：パレスハイツ、ジェファソンハイツ、リンカーンセンターを事例にして - 上智大学 -

目的

本事業には、大きく分けて二つの目的があった。第一の目的は、自らが通う大学と地域をより身近なものとして捉え直す契機をつくることである。そもそも千代田区に位置する上智大学に通う学生たちが、日常的にどれだけ地元を目を向けているのか、と問うと、その答えは必ずしも芳しいものではなかったからである。そこで本学北米研究ゼミ生を対象に、歴史の彼方に忘れ去られている日米関係について「過去を発掘する」経験をすることで、地元意識を高めてもらおうと考えたのである。さらに第二の目的は、大学生が発掘した歴史を地域の人々に披瀝することで、大学と地域との結びつきを深める契機をつくることであった。学生たちが地元の方々と接する可能性が高いであろう飲食に関しても、尋ねてみるとキャンパス内の学食が中心で、接触機会が少ないことが判明した。そこで、何らかの形で象牙の塔的な閉鎖性を打ち破る自らを開く試みとして、地元の方々に関心を持ってもらえそうな千代田区史を紐解くことにした。

研究内容・結果

第二次大戦後の千代田区には、戦後占領を行った連合軍の家族用住宅地区があった。隼町の「パレスハイツ」(図1) 永田町の「ジェファソンハイツ」(図2) 霞ヶ関の「リンカーンセンター」(図3) である。しかし、今では跡形もなく、人々の記憶からも消え去って久しい。それもそのはずで、現在はそれぞれ国立劇場、衆議院議長と参議院議長の公邸、国土交通省第3合同庁舎)が建っており、戦後日本に駐留した在日米軍が接收して、二百数十に及ぶ宿舍群を建設したことは、忘却の彼方に霞んでいる。



図1 パレスハイツ <https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/10756455/14>



図2 ジェファソンハイツ

United States. Armed Forces Pacific. Office of the Chief Engineer, Dependents Housing: Japan & Korea (Tokyo: Gijutsu Shiryo Kankokai, 1948), p.22.



図3 リンカーンセンター <https://uofmd.maps.arcgis.com/apps/MapJournal/index.html?appid=6eb9077e3025434dab81b0eadbf4ca29>

考察・まとめ

本事業で学生たちが歴史的調査の対象としたのは、戦後日本を占領した在日米軍の軍人軍属およびその家族が居住する目的で建築された「米軍住宅」である。これまでに我が国では「米軍ハウス」、「外人住宅」などとも呼ばれてきたが、アメリカ合衆国では Dependent(s) House すなわち「扶養家族住宅」と呼んでいる。学生が考現学的な意味において発掘したのは、いまから75年前に建てられた住宅地区である。

こうした生活空間に接した戦後日本人は、圧倒的なアメリカ生活文化に影響を受け、高度経済成長へと疾走していくのである。その実像を文献・映像資料から歴史的に再構成していく作業を行ない、2021年10月30日に南山大学で行われた研究交流会で発表し、コミュニティラボライブ!では地域の皆さんに研究内容の紹介ができた。さらに2022年3月からは上智大学図書館・6号館でその歴史展示を行っている。